

令和6年度 日本大学スポーツ科学部 個人研究費 研究実績報告書

所属： スポーツ科学部 競技スポーツ学科

資格： 准教授

氏名： 近藤 克之

| | |
|--|--|
| <p>研究課題名</p> | <p>短距離走の伴走者育成プログラムの開発</p> |
| <p>研究目的及び 研究概要</p> | <p>本研究の目的は、短距離走の伴走者に求められる能力要素を明示し、伴走者の資質を向上させることができるような、最適な伴走の実践を目指した学修プログラム（以下、伴走者育成プログラム）を開発することである。</p> <p>重度視覚障害者が全力で短距離を走るためには、専門的な知識や運動技術を有する伴走者の存在が欠かせない（近藤，2011）。しかしながら、重度視覚障害者の短距離を全力で疾走したいという要望に応えられる短距離走の伴走者は極めて少ない。中でも、短距離走の伴走者として活動を行うかどうか検討する段階（活動準備期）や活動開始後の初心者者の段階（活動初期）に適切な情報が得られていないことがこの状況の背景にあると考えられる。</p> <p>そこで本研究では、国内のスポーツ指導者育成（養成）に関する研究を参照し、伴走者が指導者と競技者の両側面の立場を有することや障害理解を踏まえた、短距離走の伴走者育成プログラムの試案を示すこととした。</p> |
| <p>研究実績の概要</p> <p>研究の進捗状況・得られた成果・今後の課題・研究実績等</p> | <p>本研究では、下記の3つの事項が得られた。</p> <p>1 伴走者育成プログラムの前提となる研修機会の確保について 日本スポーツ協会のモデル・コア・カリキュラムで示される「グッドコーチに求められる資質能力」は、指導を行う上で大前提として位置付けられる。このことを進めるためには、日本スポーツ協会における公認スポーツ指導者資格（少なくともコーチ1）の講習会を受講することによって学修することが可能になると考えられた。</p> <p>また、日本パラスポーツ協会における公認パラスポーツ指導者資格（少なくとも初級）の講習会を受講することによって「各種障がいの理解」や「各障がいのスポーツ指導上の留意点と工夫」「パラスポーツの意義と理念」など日本スポーツ協会の指導者資格講習会には含まれない内容を学修することが可能になると考えられた。</p> <p>2 短距離走の伴走者育成プログラム内容について 濱田・CADOT, Y (2015) や大橋ほか (2016) , 時本ほか (2022) などのように、競技特性や状況に応じた研修内容を検討する必要がある。短距離走の伴走者に特に求められる内容（専門的な知識や運動技術）には、① 伴走ロープ（テザー）の用い方、② 状況を踏まえた声かけ、③ 競技ルールの理解と実践、④ 自身の短距離走力の確保（トレーニング）が挙げられる。</p> <p>また、これらを踏まえた、⑤ スターティングブロックからのスタート、⑥ コーナー走、⑦ 互いの動作を限りなく一致させるトレーニングといった競技に特化した事項に関する研修を行う必要がある。</p> <p>3 短距離走の伴走者育成プログラムの構成について 短距離走の伴走者育成プログラムの流れについては、事前学習（自身の活動の振り返りを含む）への取り組みを踏まえ、集合研修会を実施し、伴走実践につなげるというものが現実的であると考えられた。集合研修会では、体験学習の理論を援用し、実際に参加者同士で伴走者側と視覚障害者側を体験できるようにし、参加者同士がそれらの内容を協議（振り返る）するような構成が最適であると考えられた。また伴走実践の活動を重ねている伴走者に対してはリフレッシュ研修の実施などによって、伴走者としての資質を高める工夫が必要であると考えられた。一連の伴走者育成プログラム受講者に対しては、伴走者として認定される制度を合わせて設ける必要性が挙げられ、それらの伴走者のネットワークを構築することも望ましいと考えられた。仮に、伴走者としての活動を行う可能性が低い受講者に対しては、サポーターとしての認定も効果的であると想定された。</p> <p>今後の課題としては、下記の事項が挙げられた。</p> <p>まず、短距離走の伴走者育成プログラムをどのような主体（NFや有志の団体など）が行うのが良いか検討する必要がある。仮に認定制度が構築されたとして、短距離走の伴走者として継続した活動になるような競技者とのマッチングをどのように進めて行くかは、十分に検討する必要があるだろう。また、伴走者には、スポーツ指導者（コーチ）と競技者（短距離）の双方の能力が求められるため、研修の負担が生じる可能性が考えられるため、効率的なプログラム構築が必要であると示唆された。</p> |